

②③ 多代米寿賀摺

去年の秋寿盃に自祝のすりものを
 そへて呈しけるに諸君追々賀章を
 賜りぬ是をたゝにひめ置かんはその
 芳意をなみするに似たり依て上木す
 その賀章におのゝ前書あり文大
 むねひとしければ吐略し侍る且
 懇ろなる書音に品などを賜へるも
 あなれと賀章なきものはすへて
 相もらし侍りぬ

百とせもふくむよはひや松かさり
 千代かけて米のはるたつたよりかな
 我もゝあやかりたしと千代のはる
 八十八とせ見てさかり也姨さくら
 蓬萊や米の真砂の数しらす
 老の手にふれし小松をもらひけり
 米寿をふたゝひ賀す

此うへの老さき祝ふ穂長かな
 ある中や女松すくれて若みとり
 若みとり猶いつまてか松の丈
 幹寂てくつきり青む柳哉
 年の数よまん松の葉梅のはな
 百とせは今の事也花のはる

社盟を会して表一順におのゝ
 賀章をすりものにしておくり
 賜はりたる南雅の句を挙
 かそふるや人のとしまて店卸
 升なからいたゝかれけりとしの豆
 遠境よりおくり給はりし
 酒鐘は筐の中にて

盃はくたけてまゝと千々のはる
 もりあけて年の花也あらひ米
 蓬萊や老の盃とりかはし
 米のうへよはひも積てはつ荷舟
 めてたさのならふものなし米のはる
 色かへぬ松を又々はるの友

越後 乙 良
 下毛 七十老 其 翼
 上毛 半 湖
 下総 得 来
 江戸 為 山
 武蔵 等 栽
 遠江 清 阜
 名古屋 梅 裡
 指 石
 京 東 樹
 赤 甫
 難波 潮 水
 丹波 湧 瀧
 土佐 雲 外
 加賀 大 夢

その米の末たのもしや種印
 月花は老せぬ門の葉かな
 花鳥もあやかるとのよはひ哉
 喰つみの米をことふくいはいかな
 佐保姫にいくつおとりのよはひ哉
 いつまでも幹は丈夫に梅のはな
 穂たはらを積かさねてそ米のはる
 かさね着の裾まで若しよねの春
 年を経る松のみとりや老の門
 初はるの百とせちきれ小さかつき
 いつまでも蒔てふやすや米のたね
 ことの葉も精けんうへや米のはる
 松風の涼しき命いつまでも
 若みとりしておく深き構かな
 みとり立柳に風のひかりかな
 蓬萊の山を見こしや床の不二
 松の影さすやいよゝ日の長き
 ありとある中の一木や梅のはな
 花鳥にとしをかさねて米のはる
 老る木は松も少しよねの春
 年とらぬ人はなけれどと米の老
 かきりなき齢ひなつかし米のはる
 老松やまた若竹につやひとし
 出来秋や先試る米の賀寿

越中 丹 嶺
 信濃 巨 川
 出羽酒田 鳳 湖
 津軽 一 志
 松前 雷 山
 函館 竹 堂
 仙臺 羽 哺
 白石 虚 柴 坊
 二本松 風 逸
 下太田村 古 むら
 富田村 葱 玉
 会津 河 玉
 白川 雄 節
 白川 素 磴
 会津 布 山
 白川 大 鷲
 白川 素 磴

よろこひのますみの鏡千代かけて
 おも替りせぬ影やうつさむ
 八そあまり八とせを千代のはしめにて
 猶行末のはるかなるかな
 暮てゆくとしを明れば米の春
 千代の齢ひをまつこの葉
 陸奥にありといふなる武隈の
 松より君か名こそ高けれ

うら若きとしや八千代の玉つはき
 米の賀や雪の中なる芹薺
 百とせをかさねん松のみとりかな
 高々と積し俵やことし米

当所 白 亥
 函館 彰 常
 佛 孫
 資 昌
 千 惠 子
 津 輕 羽 哺
 松 前 虚 柴 坊
 古 むら
 仙 臺 葱 玉
 白 石 雄 節
 二 本 松 丁 西
 下 太 田 村 児 川
 富 田 村 桑 女
 会 津 松 月
 白 川 黙 齋
 白 川 布 山
 白 川 大 鷲
 白 川 素 磴
 会 津 布 山
 白 川 大 鷲
 白 川 素 磴
 当 所 白 亥
 函 館 彰 常
 佛 孫
 資 昌
 千 惠 子
 津 輕 羽 哺
 松 前 虚 柴 坊
 古 むら
 仙 臺 葱 玉
 白 石 雄 節
 二 本 松 丁 西
 下 太 田 村 児 川
 富 田 村 桑 女
 会 津 松 月
 白 川 黙 齋
 白 川 布 山
 白 川 大 鷲
 白 川 素 磴